

実践報告：「教育問題」を読み直す

教育学研究室 助教授

小国 喜弘

(1) 「都市教養プログラム」とはなにか

まず、「都市教養プログラム」の使命を自分なりに考えてみるところから、講義のデザインをはじめた。大学の準備過程においてすでに幾人もの同僚から指摘があったように、「都市教養」なるものが学術的に存在しないことは明らかであった。教養とはそもそも普遍性をそなえたものであり、「都市」にのみ必要な教養とは何なのかを考えることは困難であるし、本来東京都には島嶼部や青梅方面など「都市」の定義に入らない地域も存在する。東京都の設置する大学として「都市教養」なるものを教えることがふさわしいのかという、幾人もから指摘されていた疑問に私も正直にいて共感を覚えた。

ただし、授業者として考えるならば、これらの批判において安住しているわけにはいかないので、次のような筋を考えてみた人文・社会諸科学において、共通教養の崩壊が言われてすでに久しい。背後には社会の流動化によって、従来の社会科学の枠組みや前提自体が揺らぎ始めていることが指摘しえる。教育学もその例外ではない。「教育問題」なるものがマスコミで喧伝される一方で、その問題化された教育事象を説明する能力も、そして事態を改善する方向に向かわせる能力も、教育学からは失われている現状がある。

さらに問題が複雑になっているのは、「教育問題」に付すマスコミの言説によって、市民のもつイメージが操作されてい状況があることだろう。そこでは、経済や政治の失策の責任が学校に押しつけられている感すらある。

このような中で、私は、「教育問題」として問題化されている教育事象を取り上げ、それがマスコミのなかでどのようなイメージが付されているのか、そしてそこで消されている声は何なのかを、様々な資料を用いながら、学生と一緒に考えてみるような講義を展開しようと考えた。

以上のことから、現実の問題をいかに認識するのかを媒介にして、教育学の基本的な考え方や理論に触れてもらうことを第一の目的とした。それと共に、マスコミなど大衆化された言説に惑わされず、既成の言説をまず疑い、自分で調べ、そして自分の頭で考えて表現する、そういった習慣を大学教育の初歩において身につけてもらうことを第二の目的とした。

以下にシラバスを示すことにしたい。

(2) シラバス

木・1 担当者：小国喜弘

・講義の目的：新聞・雑誌・テレビなど様々なメディアにおいて毎日のように「教育問題」が取り上げられています。不登校、少年事件、いじめ、ひきこもり、学級崩壊、学力低下、教師の問題行動などなど。このような形で「教育問題」が取り上げられることがまさに「問題」なのは、マスコミで取り上げられるような事件・事象は教育にまつわる社会現象のごくごく一部であるにもかかわらず、時に報道が独り歩きし、時に拡大解釈され、あたかもそのような問題が社会に蔓延しているかのように受け取られがちであるという点にある。

その中で苦しめられるのは、教師や生徒といった教育の当事者たちである。不登校が問題として認知されるようになると、ちょっとした学校嫌いまでが不登校児として同定され、時に精神病院の患者として取り扱われることにもなっている。

・本講義では、学力低下、学級崩壊、いじめ、少年犯罪、不登校といった、近年問題となっている事象を取り上げることを通して、学校がいかなる場所として社会問題化されてきたのかを考え直してみたい。そのことを通して、受講者の被教育体験を捉え直すとともに、受講者個人が学校教育を通して無意識のうちに内面化している「私」像についてももう一度対象化してみたい。なお、映像資料をできるだけ用いることにする。

・評価：期末レポート90点、出席10点。レポートの評価規準は、以下の通りである。

- ・講義の内容を踏まえているか
- ・論理に一貫性があるか
- ・主張の根拠となる十分な資料が示されているか
- ・講義の内容を越えて発展的な学習の取り組みがあるか

・期末レポートタイトル：講義で取り上げた主題の中から一つを選び、講義の内容・自ら調べたことを踏まえつつ、各自の考えを述べよ。

・提出期限：8月1日、提出場所：学生サポートセンターレポート入れ

日程(ただし各回のテーマについては講義の進み具合、受講者の興味関心に応じて変更する可能性がある)

4月14日 オリエンテーション

21日 学力低下

28日 学力低下

5月12日 学級崩壊

19日 学級崩壊

26日 少年犯罪

6月2日 少年犯罪

9日 いじめ

16日 いじめ

23日 不登校□

30日 不登校□

7月7日 ひきこもり

14日 まとめ：自らの経験に忠実になること。もう一度原点へ。

□：「不登校」の二回目の講義では、フリースペースコスモの語り隊の方達がゲストとして参加し、自らの不登校体験について皆さんに語ってくださいます。ここではいちおう6月23、30日に設定していますが、具体的な期日は、ゲストの方の都合により前後します。日程が固まり次第改めて連絡します。

(3) 教育方法上の工夫

次に教育方法上において工夫した点について述べておきたい。

□ビデオ映像の使用

問題をリアルに認識してもらうことを目的として、極力、ビデオ映像を用いるように努めた。学級崩壊やいじめなどについては、ドキュメンタリー番組の録画なども用いた。

□対立する見解の紹介

受講者一人一人に、自らが今まで常識としてきたことを疑いなおしてもらうことに加えて、自らの考えをもういちど確立してもらうように配慮した。そのために、まず講義として配布する資料においては、極力、対立する見解、あるいは多様な見解、特に少数意見にも配慮して紹介することにした。

公教育としての大学教育を考えた場合、講師の一方的な見解を押しつけるのではなく、まずは多様な見解を紹介することを丁寧に行うべきなのではないかと考えている。講師の意見はたとえあからさまに語ることはなくても、資料の選択や組み合わせ方に必ず反映され

てしまうものなので、講師自身の考えを正統な意見として語ることはやや抑制的であってもいいのではないかと私は考えている。

ただし、あまりに抑制してしまうと、誰の授業を受けているのか分からなくなるし、こちらもつまらなくなるので、「これは私の見解であること」「これには、このような反論もあること」を付け加えた上で、語ることも努めた。

□受講者同士のディスカッション

受講者は100人前後であったが、これぐらいのクラス規模の魅力は、異なる学部、系の学生がいるために、通常であれば互いに知り合えないような学生同士が机を並べている点にある。そこで極力、知らない学生とグループをその場で作らせ、ディスカッションさせるような時間をとった。学生同士で語りあうなかで、自らの意見を修正したり、あるいは確認したりする光景をしばしば目にした。

ただし最近の学生はややシャイなので、「グループをつくりなさい」とただ指示をしてもグループにならない。教室中をまわって、「この4人で1グループ」、「この3人で1グループ」といったかたちでこちらでグループの作り方をいちいち指示する必要がある。これはやや骨が折れる作業であるが、いったんこうしてグループ化を指示すると真面目によく話し合っていた。

□ブログの使用

講義の後にも学生たちが自分の考えを表明したり、意見を交換したり、修正する場を作りたいと思い、ブログを利用することにした。

携帯でも利用できる、フリーのサイトを用いたが(www.seesaa.net)、学生たちの反応は非常によかった。

これまでも授業についての感想をとる時間は設けることが多かったが、これだと講義が長引くと走り書きになってしまうし、他の学生の感想を交流することが難しかった。

ブログに感想を投稿するように呼びかけると、多いときで20通、少ないときで4~5通の投稿があり、サイトの閲覧者(パスワード管理をしたので受講生以外は閲覧し得ない環境だった)は多い日で30人、少ない日でも5人くらいはコンスタントにいるようだった。

授業が終わってからも、授業で学んだことについて考えてみたい、と思う学生が意外に多いこと、さらに学生たちの感想が非常に多様であることに私自身も驚いた。